

ここまで幅広い医療を低価格で提供している国は、世界的に見てもあまり多くありません。このように、日本には誇るべき医療もたくさんあります。これからも日本の良いものを発信し、共有していくことが果たすべき役割なのではないでしょうか。

棚元(医) 医療保険制度は確かに誇れる点ですね。あとは災害医療が非常に強いと思います。普通はなかなか行き届かないような多職種連携や心のケアなど、救急医療以外のことも提供できています。災害医療に関するガイドラインも整っていて、ここまでシステムとして成熟している災害医療というのは他の国では聞いたことがありません。

海野(薬) 確かに国際会議に出席して、海外の学生の考えをそのまま発言していく姿勢には凄いなと圧倒されました。日本語で議論していたとしても、国内であんなにどンドン発言が飛び交う会議は行われなと思います。あとは日本の強みの発見の一つとして、かかりつけ薬剤師がありました。今回のシンポジウムのテーマの一つに日本でのかかりつけ薬剤師に似たものがあり、私はそういった地域に根差した医療を取り巻く問題は国内だけのものだと思っていたのですが、そこで台湾や世界中で同じような問題に直面しているということを知りました。こういう点も、日本を世界に発信する切り口の一つになり得ると思います。

中川(薬) 超高齢社会に対応した介護や医療制度とかも、これから日本のような状況になっていく国々からはとても注目されていますよね。それにもかかわらず、日本について自分たちが何も言えないというのは、もったいないと感じました。世界会議に出るといことは、ある意味で日本を背負うということでもあり、そう考えると責任感というか、もっと日本の良さを発

信したり、意見を出したりしないと、アジアの中での立ち位置が弱くなっていってしまう一方だと感じました。

——IFMSAではどうして日本で国際会議を開こうと考えたのですか。

棚元(医) より多くの日本人学生に国際会議を経験してほしいというのが、私たちが国際会議を誘致するに至った一番の理由でした。開催国はより多くの学生が参加することができますからね。皆さんがおっしゃっているように、例えばこれから国内で働くとしても、国際的な幅広い視野を持つことは医療者としても大切で、そのような視点を一番養うことができるのが国際会議だと思っています。さらに、

国際会議とは「刺激」「体感」「感じる」

——最後に世界会議について一言で表すと。

舟木(理) 向上心です。海外のことを学び自分の国のことも学ぶことで、まだ知らなかったことが必ず見えてくるので、そういったところから「もっと学んでみよう」とか「こうしてみたい」といった向上心につながるんじゃないかなと思います。

千葉(理) 発達です。世界会議に行くことで周囲を知ることが大切だと思います。それで自分の足りなさに改めて気づかされ、そこから改善していくことが自分の発達にもつながって、



対談を終えて。1列目左から棚元さん、海野さん、中川さん、塚本さん。2列目左から千葉さん、土屋さん、舟木さん

国際的なイベント運営を経験できる機会はなかなかないですから、私たち運営側にとっても非常に良い経験になると考えました。

それがやがて患者さんとの関わりにも関係していくのかなと思います。

土屋(理) 刺激です。国際会議に参加して、人と関わる中で必ず学術的、文化的にも対話している中から気づく部分、自分の今までになかった知識に必ず出会います。そういうことを知るといことは学生としても人としても大事かなと思います。

海野(薬) 体感できることですね。11日間という国際会議でいろいろ壁にぶつかったりもしましたが、普段は文章などを読んで知ることが多い国同士の違いを実際に話して知ること

より印象に残ったりと、総合してとても良い思い出になったということで「体感できる」にしました。

棚元(医) 学生の間には経験できないことです。旅行だったらいつでも行けるし、大人になってからも行けるけど、これだけ世界中の学生が一堂に会することって国際会議しかないと思うので、本当に貴重な今しかできない経験だと思います。この経験は、自分の成長にもつながられますね。

塚本(医) 感じるです。考えたり、発信したりすることは、もちろん日本国内でもできることです。だから「日本で行動すればいいんじゃないか」とか「行く必要ないんじゃないか」と思ったこともあります。しかし、その場の空気というか、実際の雰囲気を感じることで得られるものがあります。行かないと分からないことってやっぱり多いんですよ。まず行って感じてみる。そうすることで、きっと得られるものがありますよ。

日々の成果を実感する



メディセレスクール
黒木 央

こんにちは。今回このコラムを担当するメディセレスクールの黒木央です。肌寒い日が増えてきましたね。メディセレスクールの学生は全範囲の復習を一通り終え、問題演習中心の講義に突入しています。これまで蓄えた知識を問題にアウトプットしていくことで、問題への取り組み方、持っている知識の使い方を身につけることを目的としています。

この時期には学生から「今やっている勉強が身につけている実感が湧かない」「どう勉強して良いか分からない」といった相談が多くなってきます。知識がほとんどない状態で勉強に取

り組むと新しい発見がたくさんあり、知識が増えているという実感も湧きますが、勉強が進むにつれてその実感も薄れていきます。このコラムを読んでくださっている皆様の中にも「やっても伸びている気がしない」とお悩みの方がいらっしゃるかもしれませんね。

メジャーリーガーのイチロー選手は打率よりも安打数にこだわっています。その理由を、9年連続200本安打を達成した際のインタビューで「打率3割を守ろうとすれば辛い打席も、ヒットを1本増やしたいと思えば楽しめます」と答えたそうです。打率は毎日変動し下がることもありますが、安打数は減りません。「数」に重点を置くことで日々の成果も実感でき精神的に

も安定しますので理にかなった考え方です。

日々の勉強の成果はヒットの数のように明確に数値化しにくいですが、勉強も同様に考えてみてはいかがでしょうか。テストの点数だけでは1日単位の成果は見えにくく、場合によっては勉強をやっているのに点数が下がることもあるでしょう。また、闇雲にこなすだけでは成果の把握はできません。日々の勉強をする際は、自分がまだ解けない問題を見つけ、その問題が解けるようになることを目標に勉強してみてください。そして、その日にできるようになったことに目を向け、「今日はこれができるようになった」と確認することで日々の成果を実感できるかもしれません。

失敗から学ぶ薬を使う時の12のルール

著 齋藤百枝美(東京大学薬学部実務実習研究センター教授)/宮本法子(東京薬科大学薬学部客員教授) A5判/96頁/定価1,200円+税

薬事日報社

書籍のご注文は、オンラインショップ(<http://yakuji-shop.jp/>)または、書籍注文FAX03-3866-8408まで。